

★(302p)「社会的生産過程のあらゆる意識的社会的統制や規律」「社会的労働のあらゆる一般的組織」に触れているとおり、「工場内分業」に「社会主義様式」をだぶらせて記述している。だが「同じもの」ではなく、本質的に全く異なる。

記述項目	社会的分業	工場内分業	★想定：社会主義
・生産工程の媒介1	商品	商品を生産しないこと（工程終了で商品）	商品生産は全廃止：全工程が統制された分業による「使用価値生産」。
・生産工程の媒介2	商品売買（生産物として関係）（間接的に社会的労働・価値物神支配）	結合労働力が同一資本家に売られる（労働力と仕手関係）（生産手段だけでなく労働も資本が所有：直接的に社会的労働・物神性の消失）	結合労働力が「生産者の協働」で使用（売られない：資本が所有した「労働使用权」は「生産者の所有」：労働力活用への自由・最適決定力の獲得）（直接的に社会的労働・物神性の消失）
・生産手段の所有	多数の独立生産者の分散所有	資本家の手に集積（工場内では集中）	国内全生産手段が「生産者達の一括所有」
・分業への全体労働の包括	偶然と恣意の結果（無政府的）	比例・均衡の鉄則（目的商品・「個別生産物」の「生産」のための均衡）	比例・均衡の鉄則（全「消費」のための「全生産物」の均衡）
・社会的欲望と使用価値生産との均衡	※1：保持しようとするが両者は「量的に異なる・不可能」：①社会的欲望量は、一つの内的紐帯（賃金・再生産費という狭い欲望範囲）により自然発生的体制に収束。（社会的欲望以前の狭い限界量）、②使用価値生産への労働時間分配は価値法則が決める。（使用価値の「生産力」均衡が目的ではない）	※1：各工程の要求量（各社会的欲望）、は、各工程の比率が生産する量（各生産される使用価値量）と一致する、「一致させること自体が直接的目的」	※1：「全生産の均衡」は、「一資本や中央等での一部の判断」では不可能。各部分生産者たちの「自主的計画・判断」で、「社会的欲望量」に適応する生産に統制。
	※2：均衡は、不断の不均衡の反作用（「無政府性」による均衡の偶然性、「競争」による均衡の破壊）	※2：基本的に、常に均衡。（「生産」は均衡しているが、生産後の「流通の価値法則」により、工場内分業に反作用）	※2：基本的に、常に均衡。（生産後の実現する「消費量」、「使用価値（効用）の価格」により、反作用）
	※3：アポステリオリ「流通過程終了後に」、生産者たちの無規律な恣意を圧倒する自然必然性「価値法則という物神による制御」。	※3：アプリオリ「生産過程開始以前に」、計画的規律。「資本による意識的制御：人間の機械化・疎外された労働」。	※3：アプリオリ「生産過程開始以前に」、計画的規律・「生産者たちの意識的制御：人間本来の生産労働」・社会的協働の中で実現される「各個人の自由な労働・労働疎外の克服」。
・分業の前提	「競争」（他者との敵対的個性、動物的個性、孤立的個性、アトム的個人、）	全生産に対する資本家の無条件的権威（個性の否定、機械的個人）	全生産に対する「人間性」の無条件的権威（社会的個人主義・民主性）
・「社会的労働のあらゆる一般的組織に対する、全社会を「一つの工場」に転化する、という工場制度の熱狂的弁護者の非難、への反批判	「資本家」階級の、不可侵の所有権・自由、自律的「独創性」（実際は価値物神性・神の手・市場への隷属）	「細部作業への労働者の終生的拘束」と「資本」に対する部分労働者の無条件的隷属	※社会的分業：「全個人・生産者」の、不可侵の所有権・自由・「本当の目的意識的創造性」 ※工場内分業：分業への拘束からの「解放」、生産者自身が定める規律・統制の、諸個人の自主的遵守 ※「社会的欲望に適応する使用価値生産」という点では「一つの工場」である、しかし、 ※非難者・資本家は、それが「悲惨な資本主義的工場内分業の全生産への拡大」としてしか理解できない。 ★ソ連型を経験した「自称マルクス主義者」の中にも、「社会主義は一つの工場にはならない」という「誤解」が多い（ほとんどが「過渡期経済との混同」）。

★社会主義経済は、「自由な諸個人」による「一つの工場」のような運動となる。

★ここから想定すれば、「社会主義的計画化」とは「生産数量問題」ではなく、「消費（社会的欲望）への適応を実現する生産体制の継続的変革運動」のこと、になる。